

ジュリアン・グリーン



南部

大久保輝臣訳

敵

豊崎光一訳

影

渡辺守章訳

人文書院

^{おおくばてらおみ}
大久保輝臣 1928年東京に生まれる。東京
大学文学部卒業。学習院大学教授。著書『現
代世界演劇の展望』(共著)、訳書、イヨネス
コ『ノート・反ノート』、『発見』、プール『猿
の惑星』、カミュ『戒厳令』他。

^{とよさきこういち}
豊崎光一 1935年東京に生まれる。学習
院大学文学部卒業。学習院大学教授。著書
『砂の顔』他。訳書、ル・クレジオ『愛する
大地』、ブルトン『通底器』、ジューヴ『カト
リーヌ・クラジャの冒険』他。

^{わたなべもりあき}
渡辺守章 1933年東京に生まれる。東京
大学文学部卒業。東京大学教養学部教授。著
書『クローデル——劇的創造力の世界』、『虚構
の身体——演劇における神話と反神話』他。
訳書、『ラジヌス戯曲全集』他。

南部 敵 影

ジュリアン・グリーン全集 5

1981年12月10日 初版第1刷発行

訳者 大久保輝臣
豊崎光一
渡辺守章

発行者 渡辺睦久
発行所 人文書院

京都市下京区仏光寺通高倉西入ル
電話075-351-3391 振替京都1103

定価 3000円

印刷所 河北印刷株式会社
製本所 坂井製本所

0397-120605-3266 Printed in Japan, 1981 ©

ジュリアン・グリーン

南部

敵

影

劇作 目次

南部	三幕	5
敵	三幕四場	125
影	三幕	225
訳者あとがき		349

南部

三幕

《ある危険な情念を激烈な解放によって浄化すること》
アリストテレスは悲劇をこのように定義しているが、わたしはこの戯曲にこれ以上適切な要約を与えられるだろうとは思わない。

J・G

登場人物

イアン・ヴィンチェフスキー 二十四、五歳、士官

エドワード・プロデリック 四十歳、男やもめ

ジミー 十四歳、エドワード・プロデリックの息子

ホワイト氏 ジミーの家庭教師、六十歳

エリック・マックルア 二十歳

ジョン小父 黒人、七十歳もしくはそれ以上

黒人の少年と少女

ジエレミー 黒人

レジーナ 二十二歳、エドワード・プロデリックの姪

ストロング夫人 エドワード・プロデリックの姉、やもめ

アンジェリーナ 十六歳、エドワード・プロデリックの娘

エリザ

リオロー夫人

リオロー嬢 その娘

第一幕の冒頭、讚美歌^{ア・マ・イ・ド・ウ・イ・ズ・ミ}の主よ、共に宿りませ^ミの最初の二小節が聞こえる。

この戯曲の事件はアメリカ南北戦争のはじまる数時間前に起こる。幕切れの砲声は、一八六一年四月十二日の早暁、北部と南部の戦闘開始を告げる。

劇行為が展開される場所は、サウス・カロライナ州チャールストン市郊外にある大農場の居間。^{サウソン}

装置をよく理解するためには、破風と太い円柱のある、パエスト^{ウ注}のギリシャ風神殿を模した広大な邸宅を思い浮かべなければならぬ。円柱には脚がなく、地面に直接支えられている。そのうちの二本が居間^{サウソン}の内部から、大きなフランス窓を通して、上手と下手に見える。二本の円柱のあいだに、柏の木の長い並木道がのぞいて見え、モスグリーン色（まさに緑青のような）の葉蔭が垂れこめて、ごくかすかな風にも揺れ動く。

居間^{サウソン}の家具は一八五〇年代のいささか重々しい様式。

訳注 サレルノ灣に望むイタリアの古い町。古代ギリシヤの植民地として建設され、数ある遺跡のうち、ポセイドン神殿とパジリカ会堂がとりわけ有名。

第一幕

第一場

(幕が開くと、下手、観客に背を向けたイアン・ヴィシエフスキー中尉が、立ったまま、じつと身動きもしない。乗馬用の細身の杖を手にしている。遠くに教会の歌声が聞こえるが、歌詞ははっきりわからない。数秒たつと、上手から、レジーナが駆けこんできて、窓に近よるが、ヴィシエフスキー中尉の姿は目には見えない。並木道のほうをのぞきこんで、だれかを探している様子。それからじつとして、歌声に耳をすます。歌の一節が終る。

しばらくすると、その場にだれかがいるのに感付いたように、レジーナは振り向いて、ぎくりとする。)

レジーナ——びっくりするじゃありませんの、ヴィシエフスキーさん。どうやってだしぬけに現れたりなさるのか、まさかそんなところにいらっしやるなんて。

イアン——並木道にいても思ってたらした？

レジーナ——いいえ。なぜそんなことをおっしゃるの？

イアン——並木道にいたかもしれないからね。

レジーナ——並木道にいらっしやるうと、どこかよそにいらっしやるうと、あたしにはどうでもいいことですわ。(沈黙)

イアン——ミサが終らないうちにもどってくるような女じゃないでしょう。あの女は神を恐れ、父親を怖れている、

レジーナ——かえっておいやじゃありませんの、日曜日に教会にいらっしやるうと、今日午後はみんなあの教会と称するパ

ラックに閉じこもっている。この家のなかで、ぼくたちは完全にふたりつきりですよ。

レジーナ——詰まりませんね、その点についてぼくがどう思っているかなんて。どっちみち、このあたりにカトリック

イアン——詰まりませんね、その点についてぼくがどう思っているかなんて。どっちみち、このあたりにカトリック

教会がないってことに変わりはありません。

レジーナ——あの讚美歌を聞くとどうお感じになる？

イアン——なんにも感じませんね。

レジーナ——なにをなさろうとむだですわね、あなたはけっしてこの国の人間にはなれない。北部の生まれで、もう

教会を信じていないあたしですら、今でもあの古い讚美歌を聞くとしんみりするのに。他所の人よ、あなたは。

イアン——アメリカは他所者の国ですよ。

レジーナ——それにしてもね……結局はお互い似てくるようになるものだわ。でもあなたの場合はちがう。いくらそ

んな軍服を着ていても、依然として他所者なのよ。(その言葉を口にしたがら顔をそむける。) アンジェリーナ

の話では、あなたは十二歳のときお祖父さまといっしょにこちらにいらしたそうですけど、ほんとうですか？

イアン——そうです。四八年の反乱のあと、ポーランドを離れました。

レジーナ——ロシア軍に対する反乱？

イアン——プロシヤ軍に対する反乱です。連中はボズナニの広場で父を絞殺し首にしました。六人の首謀者といっしょに。その晩、祖父がぼくを起こして、逃げたんです。

レジーナ——あなたにはなにもなかったんですか、プロシヤ軍は？

イアン——ええ、なにも。父の処刑のあと鞭で打たれましたが見せしめのためだと言っていましたね。それだけです。

レジーナ——鞭で打たれたのに、なにもないと思っていらいっしょなの？

イアン（静かに笑いながら）——十二年前の話です。苦痛も軽くなりますよ。

レジーナ——さっきはなぜおっしゃったの、この家のなかでは完全にふたりつきりだなんて？

イアン——それは事実じゃありませんか？

レジーナ——ちがいます。黒人たちがいますわ。

イアン——黒人たちはものの数じゃありません。連中は家具同然ですよ。

レジーナ（そっけなく）——あたしはそうは思いません。（沈黙）答えていただけませんか、あたしの質問に？

イアン——なぜぼくがふたりつきりだなんて言ったのですか？

レジーナ——ええ、そう。

イアン（レジーナのほうを振りかえって）——きっかけを差しあげるためにです、ぼくに話しかける。

レジーナ（急にかつとして）——いったいなにをあなたに話しかけることがありますの？

イアン——はつきりご存知のはずですよ、ぼくと同様に。

（歌声が止む。）

レジーナ——それをおっしゃるためでしたの、あたしがはいってきたとき、ここで待っていられしたのは？

イアン——待つてはいません。ぼくはここにいたのです。

レジーナ——おっしゃることが不愉快だわ。要するに、おっしゃることがすべて不愉快なのに、ついあたしは耳を傾けてしまう。ですけどね、あたしがあなたに打明話をするなんて思っていたら、とんでもないかんちがいですわ。

イアン——今すぐには申しませんよ。

レジーナ——なんてまあ失礼な！

イアン——ええ、そうですね。

レジーナ——さっきの話をうかがってから、あたしはうれしくてたまりません。ええ、そうですね、あなたが鞭で打たれたなんて、痛快だわ。

イアン——これはどうもご親切に。いかがですか、そのお気持を詳しく説明なさったら。

レジーナ——そうですね、あなたの受けたその刑罰は一種の前払いみたいなものだわ。あなたが将来恥知らずな人間になることを見越して、すでに当然受けていい刑罰だったのよ。そのせせら笑い、その……ヨーロッパ人らしい皮肉たっぷりな沈黙、それを見越してね。そう、三日前から、あたしはあなたに面と向かって話す機会を待っていました。あたしはあなたを愛してなんかいませんわ、ヴィシエフスキーさん。

イアン——ほらごらんさい、あなたはぼくに言うことがおありだった。

レジーナ——あなたのなかにはなんとなくあたしの気に入らないもの、それにわけがわからないものがあるのよ。ええそう、こんなにあげすけな言いかたをして、どうせまた嘲られるにきまっているけど……ほら、その目にはちゃんとそう書いてある……

イアン——そう言いながら、なぜご自分の目をそらせるんです？

レジーナ（相手をまともに見据えて）——そらせてなんかいません。あたしは自分の故郷の人が話すようにあなたに話している。あたしには、南部の女性にあるような、あなたにごまをすったりするような手練手管はありません

ん。(知らず知らず相手に近よって) あたしはうそをつかない人びとの手で単純に育てられました。あなたのなかであたしの大きらいなところ、それはうそですわ。

イアン——うそですって？ でもいったいなぜあなたに対してうそをつかなければならないんです？

レジーナ——あたしに対してはむろんそんな必要はありません。どうせあたしは貧乏な親類のひとりで、だれからも注目されない北部生まれのお人好しだし、あまり美人でもないし。あなたはご自分でかみが鋭いと思っていられちゃうんですよ、ヴィンチェフスキーさん。でもね、あたしもあなたと同じくらいかみが鋭いんです。あなたがうそで疑り固まった人だってことぐらい、何日も前からわかっていましたわ。

イアン——あなたはプロデリックさんのご親戚ですからね、したがってぼくはあなたの家うちにいることになりませんか？

レジーナ——どうかなさったの？ ここはあたしの家うちなんかじゃありません。あたしの家うちはここじゃなくて、北部なんです。あたしはここに連れてこられた、世話をしてくれた伯父が破産したので。伯父の従弟にあたるプロデリックさんが農園にくるように言ってくれました。でもあたしに両親がいたら、けっしてここにはこなかったでしょう。あたしはこの農園が大きらいだわ。ここで一冬ひとふゆを過ごしました、雪のない冬を。でもあたしはどうしても雪を見ずにはいられません。(イアンは思わず身動きをする。) この家うちのなかで、なぜあたしがあなたとふたりつきりなのかご存知？ それはね、あたしが教会に行こうが行くまいが、そんなことはどうでもいいと思われているからですわ。あの人たちとあたしと同じ血筋の人間だということを思いだすのに、あの人たちはいつも努力しなければならぬ。部外者なら好き勝手にしていにかまわないし、あの哲学者のエマーソンみたいに、ユニテリアン派ユニテリアン派だろうとかまわないのよ。だからあなたがあたしの家うちの客だとか、あなたに対して勝手な口のききかたができないとか、言わないでいただきたいわ。

訳注 三位一体を否定するキリスト教の宗派、イギリス、アメリカに多い。

イアン——あなただだって、他所者なんだ。

レジーナ——それとこれとは話がちがいます。とにかくあたしはアメリカ人ですから。

イアン——さっき、雪のことをおっしゃいましたね。

レジーナ——言いましたわ。きつとあなたは子供っぽいとお思いなんでしょう。

イアン——いや、とんでもない。(口調が変わる) ぼくも雪を見たいんです、あなたと同じように。ときどき気持ちが
いじみた想像をすることがありますよ、鎧戸を開けると、日光にきらめくまっ白な雪野原が今にも目にはいり
そうで、幸福のあまり身体がふるえて笑いだしそうになる、まるであのすてきな寒さの香りをかいだ少年みた
いに、叫び声をあげて駆けだしたくなるような……

レジーナ——やめて！ そんなこと言わないで！ いやです、そんな話は。もうすでに夏がさしかかって、すでに猛
暑が顔に吹きつけているのに。(沈黙) まだどのくらいここに滞在なさるんですの、ヴィンシェフスキーさん？

イアン——ぼくの休暇は五日後に終わります。

レジーナ——というと、金曜日に出発なさるわけね。

イアン——金曜日の夜明けに。ここから海岸まで馬で三時間かかりますし。

レジーナ——すると正味四日しかありませんわね。今日はもう数にはいらなないし。

イアン——ええ、そうおっしゃられれば四日です。その前に戦争がはじまらないとしてですが。

レジーナ——戦争ですって！ あなたも戦争になると思っていらいっしやるの？

イアン——だれもかれも言ってますからね、必ず戦争になるって。だから結局はきつと戦争になりますよ。火のない
ところ煙は立ちませんから。

レジーナ——戦争になったらどうなさるんですの？

イアン——部隊にもどります。